The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評会報告>三木英著『宗教と震災ー阪神・淡路、東日本のそれから』書評1
Author(s)	金子, 昭
Citation	宗教と社会貢献. 2016, 6(1), p. 79-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55542
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三木英著
『宗教と震災―阪神・淡路、東日本のそれから』
森話社、2015 年 10 月、四六判、251 頁、2,600 円+税

金子　昭*

本書は、「Ⅰ　大震災と教団」、「Ⅱ　被災者による被災者の救い」、「Ⅲ　震災記憶の風化のなかで」、そして「終章」の 4 部から構成されている。Ⅰでは、宗教を制度化された宗教としての教団宗教として捉えた上で、阪神・淡路大震災及び東日本大震災におけるそれぞれの活動を取り上げている。これらが制度化された宗教であるとすれば、Ⅱでは、被災者自身が担い手となって作り上げてきた、制度化されざる宗教的運動に着目する。Ⅲでは、時間の経過とともに落ち着きを見せていく被災地において、Ⅱの動きが記憶の風化過程にどう抗って定着していくかを考察する。時間が経てば、被災地がやがて「旧」被災地と変容し、そこでの宗教も民俗宗教としての傾向が強くなる。「終章」では、そうした過程の中での宗教の社会的機能について総括的な議論を行う。

さまざまな形態と様相を持って立ち現われる宗教に対して、三木氏は、社会的統合を果たす宗教というデュルケーム的視座に基づき（デュルケームは本書全体を通じてよく引用される）、これら多様に現象する宗教の社会的機能を一貫して追跡している。そのため、さまざまな宗教の活動を論じながらも、三木氏の立ち位置にはぶれが見られない。そこには、確乎たる学問的背景が感じられ、読者も本書の論述に安心してついていくことができる。そしてこれに加え、自らも被災地という「聖地」に追悼の人々と共に立ち、震災モニュメントを廻る巡礼に参与観察を試みるなど、生身の宗教社会学者として取り組むことで、三木氏は、そのような考察を臨場感あふれる仕方で提供してくれる。

本書の何よりの特徴は、大きな時間軸を入れて宗教者の支援活動を考えていることにある。支援はそのつど現在の状況に対して行われるが、その状況は刻々と変化していき、それらに対応して活動の様相も様変わりする。1 年過ぎ、2 年過ぎ、10 年過ぎ、20 年過ぎて次第に被災地も変貌し、被災

* 天理大学おやさと研究所教授　akira-k@sta.tenri-u.ac.jp

者も世代交替していく。そうした容赦ない時間の流れの中で、宗教（者）は被災地や被災者に向き合い、関わり合っていくことになるのである。

本書は、まさに阪神・淡路大震災の 20 年の節目の年に刊行された。三木氏は、大震災を語り継ぐことが犠牲者のためだけでなく、社会の将来のためにも必要であり、「この記憶の継承に、宗教は寄与することができるだろうか」と問う。この中に、本書成立に込めた著者の万感の思いがある。

不慮の災害や大事故は突如として発生する。そして、その救援・支援活動もいきなり最初に大きなクライマックスを迎える。ここに、いわゆる「災害ユートピア」的状況としての「震災直後のコミュニタス的生活様態」も見られる。想像を超える異常事態に直面した後で、時間の経過と共に、当初の混乱や「コミュニタス的生活様態」も去り、被災地は次第に日常生活に戻り、当初の支援の盛り上がりも減衰していく。そこに見られるのは、被災地支援のアンチクライマックス的状況であり、関係者の「ポストフェストゥム（祭りの後）」的な気分だと言えるのではないだろうか。

三木氏はエリアーデを引用しつつ、被災地における震災モニュメント交流ウォークにおいて回帰される原点が、まさに震災直後のコミュニタス的生活様態であることを述べている。それは、「震災犠牲者が礎となって出現せしめた非日常」を「祖型」としたものであり、交流ウォークはこの祖型を模倣・反復することで、大震災とその犠牲者たちの記憶はいつまでも保たれて行く。この過程の中で、宗教的支援の内容や担い手の変遷が生じてくるのである。

しかし、「祖型」への回帰が全てではない。むしろ、被災地に必要なのは、過去への回顧から教訓を汲み取り、未来へと記憶をつなげていくことである。実際、交流ウォークのような慰霊行事は、「旧」被災地を「聖地」とした「巡礼」であり、そこに被災地の記憶を体験者が未体験者と共に分かち合い、記憶の伝達と生活の再興を確認する志向性が含まれている。

「巡礼」が真に可能になるには、ある程度の時間の経過と宗教性の醇化が不可欠である。しかも、そうした慰霊行事参加者の姿勢や顔ぶれは変化していかざるを得ない。大震災の体験者は高齢化し、やがては姿を消していくだろう。また、若い未体験者の姿が増え、やがては全員が未体験者ばかりになるだろう。かくて慰霊の行事は、過去と向き合う機会から（慰霊した上で）決意を新たにする場へと性格を変化させていくことになる。

被災地での支援活動は、災害発生当初の緊急支援の段階から、次第に復興支援に移行し、やがて現地が落ち着いてくると日常的な支援になる。阪神・淡路大震災では、2 年ほどで日常に戻り、その頃には宗教者の組織的な活動もほぼ途絶えたとされる。三木氏は、組織的活動を教団全体の組織のレベルで考えている節があるが、教団レベルでの活動を終了した後も、個々の宗教者や有志組織の単位で地道な活動を継続しているのは言うまでもない。また、その活動は時間の経過と共に、限りなく日常的支援に近づいたものになっている。

東日本大震災の場合、そうした傾向はより顕著なものになっている。被災地域が広範に渡り、いまだに福島第一原発事故の影響が続いているだけでなく、全国で NPO 法人が立ち上がるような時代になったということもあって、発生後 5 年を経過している現在、キリスト教系の「東北ヘルプ」や仏教系の「サンガ岩手」などをはじめ、少なからぬ宗教者有志のグループが被災地の支援組織として確立し、積極的な活動を続けている。

非日常的状況での宗教的支援は、宗教の持つ倫理性・実践性が前面に出てくる。そこでは、活動の担い手としての宗教者の人格性も目だって顕れてくる。それが次第に日常的状況に戻るにつれて、宗教における祭祀性・民俗性が強くなり、担い手としての宗教者も突出した活動家よりも、むしろ地道な支援者へと移行し、やがて匿名化していく傾向にある。そして暮らしが日常に戻った時、そこでの宗教的活動は地域での「祭り」という姿を取る。祭りの担い手はまさに被災者自身であり、そこで自分たち自身による癒しと蘇りが果たされていくことにもなる。三木氏は、自らも参加した神戸での「交流ウォーク」の内に、巡礼の側面や祭りの側面が交錯する様を目の当たりにし、震災後のそうした宗教性の変容を看取している。

こうした過程は、救済宗教から民俗宗教への変容過程とも言えるかもしれない。そして民俗宗教もまた、変遷を遂げる。宗教も一つの社会現象として、時代と共に栄枯盛衰は免れないのである。このことは、宗教社会学の会編の『生駒の神々』（1985 年）から『聖地再訪 生駒の神々』（2012 年）にいたる「四半世紀の歳月」にたどることができる（三木氏は両方の著作に関わり、後者では執筆者代表である）。宗教もまた、流行る時もあれば廃れる時もあり、それが宗教のまぎれもない現実の姿である。

「旧」被災地になった被災地を、時間の波がさらに洗っていく。それはや

がて歴史の一部（歴史的被災地）となり、人々の記憶からますます遠ざかっていく。これが風化の現象である。そうした時、他の伝統的な宗教行事と同様、追悼行事も後継者がいなければ、そこで途絶えてしまう恐れがある。

人々の心をつなぎとめるために、被災地での鎮魂行事もまた世俗化される傾向も出てこよう。その大規模な例が神戸ルミナリエである。この光の祭典は、もともとは犠牲者の鎮魂と被災地の復興を願って始められたものだった。しかし、このイベントでさえ、近年はイルミネーションを縮小する傾向にあり、今では、より集客力のある観光イベントに脱皮することも検討されているという。

三木氏は、とくに第 8 章において、被災地で行われる民衆的儀礼（地車祭り、地蔵盆、交流ウォーク）の観察を踏まえ、大震災の個人的記憶が薄れていく中で、集合的記憶を後の世代につないでいくことの難しさに言及している。ここでの考察は大変興味深い。とくに、個人的記憶と集合的記憶に分け、さらに集合的記憶を下位分類していく手法は、このテーマについての宗教社会学的議論を、今後より実り豊かなものにする要素を持っているように思われる。

「終章」は、本書全体の叙述を総括し、宗教研究者のアクション・リサーチの課題をも指摘してくれる重要な章である。宗教研究者には、被災地の記憶の風化を防ぐために、ともすれば光の当たらないような場所や人に、よりいっそう着目していくことが求められてこよう。そのためには、宗教研究者は黒子に徹しなくてはならない。震災を“祈念”する講演会やシンポジウムなどを開催する際、どうしても集客力のあるスピーカーに頼るという傾向が出てくるが、こうしたイベントそのものが移り気な人々への迎合を生む危うさを持つことにも留意すべきである。

東日本大震災の被災地も、十数年あるいは数十年も経てば、いずれ「旧」被災地と呼ばれることになる。同じ 20 年後の時間経過であっても、阪神・淡路大震災と東日本大震災とでは、時代や地域性、また人々の関わり方の相違によって、「旧」被災地の宗教者の活動がどのように変化しているか、被災地「聖地再訪」を通じて比較研究調査をしていけば、宗教社会学的な意味で数多くの有益な考察が得られるだろう。これは次の世代の研究者の課題になるが、その時には本書は重要な参考文献の一つとなるはずである。